

<論文>

日モ語の慣用句を翻訳する根本的な原則

—日モ語の翻訳を事例に—

アシガイ・デルゲルマー (Ashgai Delgermaa)

(筑波大学大学院人文社会科学研究科特別研究学生)

Abstracts:

The aim of this paper is firstly to determine and find out the methods of phraseology translation used in Japanese - Mongolian translation. Secondly, the paper tries to define the main principles of all the methods of phraseology translation. The analyses show that four translation methods – literal translation, translation with corresponding phrases, analogical translation and the explanatory translation are the main methods used in Japanese – Mongolian phraseology translation. In addition, the author found one possible variation: the combination of literal and explanatory translation methods. It was revealed that 1) literal translation and 2) translation with corresponding phrases show syntactica and componential equivalency and 3) analogical method and 4) explanatory method involve pragmatic equivalency. The hierarchical relations of the four methods of phraseology translation are shown to be consistent with the hierarchical relations of translation in general.

1. 研究目的・課題

本研究の第一の目的は、日本語の慣用句がモンゴル語にどんな翻訳方法で訳されているかを明確にし、使用されている方法の変異を位置づけることである。第二の目的は慣用句の翻訳方法の背景にどんな原則が働いているかを確定することにある。したがって、これらの目的を達成するために次の課題を取り上げる。

- ・慣用句の翻訳に求められる理論的な概念・規定を明らかにし、先行研究を概観する。そして、提唱された翻訳方法中からより客観的なモデルとなるものを選定する。
- ・日本語からモンゴル語に翻訳された文学作品から慣用句の翻訳を抜粋し、分析する。また、そこで使用されている方法とその変異 (variation) を明確にし、各翻訳方法の文脈上の相応性と有効に活用できる基本的な条件を位置付ける。

- ・翻訳の理論的な原則を明らかにし、完成度を評定する基準を指摘する。また、慣用句を翻訳する各方法がどんな原則に従って実現されているかを確定する。

2. 慣用句の翻訳に求められる概念・規定

慣用句の翻訳に求められる概念・規定は翻訳全般と同じものになっている。その根拠は慣用句の特性と意味単位として示す大きさにある。慣用句は構成要素個々の意味の総和から句全体の意味を生じないという特性をもつほか民族性も含む。よって、完結した意味をもつ独立した単位となる¹。翻訳という概念の基底に「訳語を造るとは一つの言語手段によって表現された内容をほかの言語手段で訳し、表現することをいう」、あるいは「原語(以下 SL)の意味を受容言語(以下 RL)の手段で改めて再構成する過程 (process)をいう」などの理念がある (A.V.Fyodorov1983d、A.D.Shveitser 1988、R.Gurbazar 1996:5)²。「再構成する過程」として SL の言語単位で現れた意味の特性を RL に様々な文法のおよび語彙的变化(transformation)を取り入れて訳すことが強調されている。特に、慣用句、慣用的な表現は最も訳しにくい単位の一つとなっているため、より複雑な変化を取り入れて訳すことが多い。

3. 慣用句の翻訳方法に関する先行研究

慣用句の翻訳方法問題を課題にした先行研究の中では様々な方法が提唱されている。

- ・N.E. Chernisheva (1954:11): 文字通りの訳、相当訳、描写して訳す方法
- ・A.V. Kunin (1956:11): 相当語句で訳す方法、直訳、類推訳、描写して訳す方法(説明的訳)、反意語訳、結合訳 (combined method)
- ・A.V. Fyodorov (1968:194-206): 既製の相当語句で訳す方法、RL にある慣用句、ことわざ・格言などを活用し、新しい慣用句を作って訳す方法、連語的表現で訳す方法
- ・V. Gak, Ya. Retsker (1963): 相当語句訳、変異形相当語句訳、描写して訳す方法と文字通りの訳
- ・D. Dashdavaa (1973): 直訳、類推訳、抽出類推訳、説明的訳
- ・E.A. Nida, R. Taber, S. Brannen (1973:133-135): 慣用表現を普通の表現で訳す、慣用表現を慣用表現で訳す、普通の表現を慣用表現で訳すなどの方法
- ・中村(1983:42-45): 文字通りの訳、意味的訳などの方法があげられる。

上述の各方法に使用されている用語の違いはあるが、本質的にはいくつかの点で一致する四種類の方法に分けられる。(D.Dashdavaa, *ibid.*)³

1. SL の慣用句を RL にある相当語句で訳す方法(translation method by equivalent words)

2. 直訳・文字通りに訳す方法(word for word translation)
3. SL の句と意義構造の面で異なるが、伝える内容とイメージが同等である RL の句で類推して訳す方法(translation method by analogical words)
4. 説明的に訳す方法(analytical description or explanatory method)

上記の先行研究で提唱された各方法はそれぞれ英－露語、露－モ語、仏－露語、独－露語、英－日語、日－英語の翻訳を事例に出したものであり、同種の言語だけではなく、非同系の言語も対象にしている。この事実を根拠に D.Dashdavaa (ibid.) の定めた 1. 相当語句訳、2. 類推訳、3. 直訳、4. 説明的訳などの方法は、慣用句の翻訳方法のより客観的なモデルであると見なし、本研究の手段として使用する。

4. 日モ語の慣用句の翻訳

日本語の慣用句をモンゴル語にどんな翻訳方法で訳しているかを確定するために、日本語からモンゴル語に翻訳された文学作品から日本語の慣用句の翻訳を文脈と一緒に抜粋し、分析を行った。文学作品は日本の作家司馬遼太郎の『草原の記』、『最後の将軍』という二小説のモンゴル語訳である。日本語の慣用句として V.V.Vinogradov (1946) の概念を基に D.Dashdavaa (1973) が定めた慣用句の分類方式に合うものを選び、対象とした。⁴ その結果、200 句の翻訳が見つかり、上述の慣用句の翻訳方法のモデルとして定めた 1. 相当語句訳、2. 類推して訳す、3. 直訳、4. 説明的訳の四つ全てが使用されていることが明らかになった。以降、上述の四つの方法を分析し、行った考察の結果を述べる。

4-1. 相当語句で訳す方法 (translation method by equivalent words)

V.Gak、Ya.Retsker (ibid.) などによれば相当語句で訳す方法とは、SL の慣用句と意義構造 (semantic structure) が完全に相当する慣用句を RL から見つけ出して訳すことをいう。要するに、SL の句と同じ語義目録 (basic word stock)、意義成分 (semantic component) から成る構成をもつ RL の相当語句は SL の句とイディオム性、イメージ、用法などの面で完全に一致する。よって、RL は両言語の構造・文法的機能の特性による表現形式の変化を多少受けるが、意義構造の面では変化が起こらない。そのゆえ、慣用句の翻訳の最も効果的な手段であると見なされている。

例: SL: 「慶喜が江戸からつれてきている新門辰五郎とその配下の火消たちまで、遊里などで諸藩の士のはなしに耳をすまし、密偵としてのはたらきをした。」(『最後の将軍』司馬遼太郎 p.227)

RL: Эдогоос дагуулан ирсэн Шинмон Тацүгоро болон түүний мэдлийн гал унтраагчид нь хүртэл нутаг орон руугаа явахдаа овог хошуудын ноёд ихсийн яриаг чих тавин тагнуул шиг л хөдөлцгөөж байв. (Шибя Рётаро. *Сүүлчийн Шёогун*. худ. 154)

モ訳: 「～чих тавин」(chikh tavikh) → 「～耳をすまし」→ 相当語句訳

SL の慣用句「～耳をすます」は「何かを聞こうと注意すること」の意味を表しており、RL に「～**чих тавих**」(chikh tavikh)という同じ語彙意義をもつ成分から構成される句で訳されている。

日モ語の慣用句の翻訳に行った考察の結果、この方法は 200 句の内 4.5%を占めている。よって、両言語に相当語句の数が少ないことは明らかである。その原因は両民族の考え方および環境に対する生活観の違いから生ずると考えられる。また、RL に相当語句があっても場合によっては文脈の語彙的周辺との結合性、あるいは文体的相応性がないために使用できないこともある。よって、文脈との適応性を考慮する必要がある。

4-2. 直訳・文字通りに訳す方法 (word for word translation)

直訳、あるいは文字通りに訳す方法とは SL の慣用句を RL に直接訳しても意味とイメージが保たれる場合をいう。従来、この方法は意味単位の指示的・転義的意味などを捉えられないことから SL の意味を曲解させてしまうと考えられる。しかし、場合によっては句全体の意味とイメージが伝わることもある。また、A.Nida, R.Taber, S.Brannen (ibid.)、中村 (ibid.)などは慣用句の比喩的な意味を正確に伝達するのにそのまま文字通りに訳しても伝えることができると主張している。その根拠として、慣用句の比喩的意味のイメージが言語によって異なることを挙げている。しかし、比喩的な意味に度合いがあるほか、慣用句の文脈上の語彙意義的結合性と文体的相応性も大いに関連する。よって、直訳・文字通りの訳では SL の慣用句の意味を RL に適切に伝えられる場合と伝えられない場合の両方がある。ここでは直訳として SL の意味とイメージを RL に伝えられる場合のみを対象として取り上げる。

例:SL:「が、慧敏な慶喜は、その程度の春嶽の心うごきは百も承知であつたらしく、目顔で春嶽をおさえ、

—まあまあ春嶽どの、話は、おわりまでおききなされ。というようなしぐさを、目もとでしてみせた。」(『最後の将軍』司馬遼太郎 p.193-194)

RL: Гэтэл гүйлгээ ухаант Ёшинобү Шюнгакүг сэтгэл нь хөдлөн ийм байдалд орно гэдгийг зуунтаа мэдэж байсан юм шиг нүд царайгаараа түүнийг намжаан

- Шюнгакү ноёнтон минь, яриаг минь дуустал сонсож хайрла! гэх маягийн дохиог нүднийхээ харцаар үзүүлэв. (Шибя Рётаро. *Сүүлчийн Шёогүн*. худ. 131 – 132)

モ訳: 「～зуунтаа мэдэж байсан」(zuuntaa medej baisan) → 「～百回も知り得ていた」 → 直訳

SL の「ずっと前からよく知って(分かって)いた」ことの意味を表す「～百も承知」を RL に「～百回も知り得ていた」と同類意義成分で直接に訳しており、同じイメージを形成している。

この方法が日モ語の慣用句の翻訳に使用される割合は、上述の相当語句訳と同じくかなり低く、200 句のうち 4.5%となっている。その原因は直訳という方法が SL の指示的・転義的意味を捉えずにありのまま訳すことにあると言える。特に、SL の慣用句の意味固定性が高い場合、この方法

では意味を完全に伝えることができない。また、RL が両言語の構造・文法的機能の違いによる表現形式の変化を多少受けるが、意義構造の面においては変化を受けない点で相当語句訳と類似する。

4-3. 類推して訳す方法 (translation method by analogical words)

類推して訳す方法として A.V. Kunin (ibid.)は「SL の語句と意義構造、イメージの面において異なるが、伝える内容と趣旨が同等である RL の語句で訳すことをいう」と定義している。この方法は相当語句訳と本質的に類似しているが、SL の語句と意義構造の面で異なるという違いをもつ。したがって、RL が上述の直訳、相当語句で訳す方法よりも、表現形式の変化を語彙的、文法的レベルで受ける。また、この方法は RL の慣用句の活性化を実現するほか、その民族の生活、習慣、感受性などを訴える力をもつ有効な手段と見なされている。

例:a. SL:「斉彬の先進性、教養、政治感覚は四堅侯のなかでも一頭ぬきでいるが、それだけにこの工作の仕方も凄味があった。」(『最後の将軍』司馬遼太郎 p.50)

RL : Нариакра бусдаас дэвшилттэй, боловсрол, улс төрийн үзэл бодлоороо “ дөрвөн мэргэн ноён “ – ны дотор толгой цохиж байсан бөгөөд, үүн дээр аливаа ажлыг гүйцэлдүүлэх арга нь нарийн. (Шибя Рётаро. *Сүүлчийн Шёогун*. худ. 39)

モ訳:「～толгой цохиж байсан」(tolgoi tsokhij baisan) →「～頭を打っていた」→類推訳

SLの慣用句が「通常より優れている、才能をもっている」という意味を「一頭ぬきでいる」という語彙目録で表しているが、RLの句は「～頭を打つ」と異なった構成になっている。要するに、「一頭」と「頭」、「～ぬく」と「～打つ」成分の違いがあり、句の意義構造とイメージもやや異なっている。だが、結果的に同じ概念・趣旨を表すため意味伝達が十分に行われている。しかし、SLの句の意義構造が民族性を強く表している場合、RLの文脈の語彙的周辺との結合性がない、あるいは文体的に相応しないこともある。よって、この方法を用いるのに両言語の文化の違いと文脈上の相応性を考慮する必要がある。なお、日モ語の慣用句の翻訳に行った考察の結果、類推して訳す方法は200句の内24%の割合を占めている。

4-4. 説明的に訳す方法 (analytical description or explanatory method)

説明的に訳す方法とは SL の慣用句を RL に訳す相当語句がない場合、あるいは直訳と類推訳をできないとき、一般連語、単語などを用い、意味を説明して翻訳することをいう。描写して訳す方法とも言われる。この方法に対して原文(以下 ST という)の表現力、感受性などを訳文(以下 TT という)では十分伝えられない、慣用句の翻訳に効果的ではないなどといった意見が多い(A.Nida, R.Taber, S.Brannen op.cit.:133-134., A.V.Fyodorov op.cit.197)。しかし、例えば RL に相当語句があっても SL の文脈と相応しない場合は説明的訳を取り入れる。したがって、SL の慣用句を訳せない場合に使用できるという利点をもつ。また、説明的訳は SL の句の意味を完全に

分析して RL に伝えるため、意義構造と表現形式の両面、そして場合によって文体のレベルで様々な変化が生じる。各翻訳方法の中で最も複雑な変化によって実現されるものと言える。

例: SL:「幕閣と大奥は、水戸のあくのつよさをきらい、慶喜よりも紀州の少年藩主を迎えようという色が濃いが、しかし老中松平忠固の態度は表面いづれともつかない。」(『最後の将軍』司馬遼太郎 p.49)

RL: Бакүфү засаг, хатны өргөөнийхөн Мито овгийнхны хорт санааны айхтарт дургүйцэн, Ёшинобү гэхээсээ Кишюү овгоос залуу хошуу захирагч хүүг залах хүсэлтэй хүн олон байв. (Шибa Рётарo. *Сүүлчийн Шёогун*. худ. 39)

モ訳:「~**хүсэлтэй хүн олон байв**」(khuseltei khun olon baiv)→「~希望のある人が多かった」
→説明的訳

SL の「~色が濃い」という慣用句は「~迎えようとしている傾向が著しい」ことの意味を表しており、RL に「~希望のある人が多かった」と説明的に訳されている。いわば、SL の句の意味を完全に分析し、説明して訳している。したがって、RL に文と等しい構造を成す表現になっており、単語の増加が生じている。なお、文体統一のために ST の前半を「~хүсэлтэй хүн олон байв」(khuseltei khun olon baiv)という訳語の表現で切り、後半をもう一つの独立した文にしている。

今回行った日モ語の慣用句の翻訳に対する考察の結果、説明的に訳す方法は最も高い割合を占めていることが確定された。200 句の翻訳の内 65%を占めていた。よって、日モ語の慣用句の翻訳はほとんど説明的に訳される場合が多く、実践的な場において最も効果的な手段となっている。その原因は両言語の慣用句の意義構造・イメージの違い、加えて両民族の文化の違いにあると考えられる。

以上、日モ語の慣用句の翻訳に行った考察の結果 1. 相当語句訳、2. 類推訳、3. 直訳、4. 説明的訳などの方法が使用されていることが明らかとなった。なお、上述の四つの方法から二つを結合して訳した場合 (translation case consisted by two combined methods)も見られた。

例: SL:「(しかし、かの人は毒であつても用い方では薬になる。他の日の為、歡心を得ておきたい)というのが思慮ぶかい安部正弘のはらであつた。」(『最後の将軍』司馬遼太郎全集第二十巻 p.297)

(Хэдийгээр энэ хүн хор байлаа ч хэрэг болохынхоо цагт эм болно. Хэгийн өдрийн тусын тулд элэгсэг хандья) гэж алсын хараат Абэ Масахиро бодож байв. (Шибa Рётарo. *Сүүлчийн Шёогун*. худ. 20)

モ訳:「~**хүн хор байлаа ч хэрэг болохынхоо цагт эм болно**」(khun khor bailaa ch khereg bolokhiinkhoo tsagt em bolno)→「~人は毒であつても役に立つときは薬になる」→直訳と説明的訳を結合した方法 (combining method)

SL の句の前半の部分「～人は毒であっても」を直接訳しているが、真ん中の部分「～用い方では」を意味的に「～хэрэг болохынхоо цагт」(khereg bolokhiinkhoo tsagt)「役に立つとき」と訳している。そして後半の「～薬になる」の部分をもた「～эм болно」(em bolno)「薬になる」と直訳している。

この例から日モ語の慣用句を場合によって直訳と説明的訳を結合して訳せることが分かる。そして、こういった結合方法は RL に一つの方法で意味を正確に伝えないとき有効に使えることを理解できる。だが、直訳と説明的訳の結合方法を慣用句の翻訳方法の一つの変異として見せない点がある。というのは、この方法による翻訳は 200 句の翻訳のうち 2%しか占めていないからである。しかし、この方法が使用されている事実からすれば、慣用句を訳す基本的な方法である相当語句訳、類推訳、直訳、説明的訳などは四つとも互いに結合して、変異することは有りうる。

以上、日モ語の慣用句の翻訳に使用されている翻訳方法をその割合順に並べば 1. 説明的訳 65%、2. 類推訳 24%、3. 相当語句訳 4.5%、4. 直訳 4.5%、5. 直訳と説明的訳の結合方法 2% という結果となった。

5. 慣用句の翻訳方法と文脈上の相応性

上述の各翻訳方法はそれぞれ SL の慣用句の意味を RL に伝達する能力をもっている。また、いずれの方法にしても ST の意味を RT においても保つための一つの手段になっている。この点から、これらの方法を効果的に使用できる条件とその使い方の適応性を検討する必要がある。それぞれの条件と使い方の適応性を以下に取り上げる。

5-1. 直訳方法: SL の句の意味が構成語から理解できる程度に透明な場合、RL に句の意味とイメージを再構成できる。よって、SL の句の意味固定性が高い場合、意味再構成はできない。また、この方法で SL の句の意味とイメージが完全に RL に伝達できる場合は少なく、文脈および語彙的周辺との結合性と相応性によって適切な使用が決まる。

5-2. 相当語句訳で訳す方法: SL の句と意義構造とイメージの面で完全に一致することから、TT に ST の感受性、民族性、文化などに関する特性を伝える表現力をもつ最も効果的な方法である。しかし、SL と RL に共通して存在する数が少なく、また場合によって RL の内容、文脈の語彙的周辺との相応性によって使用が制限される。

5-3. 類推して訳す方法: イメージと意義構造の面で異なるが、同じ概念・事柄を伝えるため SL の句の民族性・感受性などの表現力を RL でも保てる。また、RL にある慣用句の使用を活性化する方法である。しかし、SL の慣用句が文化、民族的特性を強く表しているとき、RL の内容、文脈との相応性を考慮する必要がある。

5-4. 説明的に訳す方法: 直訳、相当語句訳、類推訳などの方法が使用不可能な場合主に使うが、使用可能な場合も取り入れるときがある。その原因は上述の方法の使用が三つとも最終的に RL の内容、文脈・語彙的周辺との相応性によって使用が決まるという事実にある。つまり、SL の慣

用句を訳せない場合用いる方法であるが、RL に一般連語句、あるいは単語・表現などで訳すことから表現力がある程度損なわれる面がある。

上述の翻訳方法を有効に使用できる各条件をみれば、それぞれ一定の場合に効果的に使えるようになっていることが明らかである。さらに、どんな方法にしても、それが使用できる決定的な条件は SL と RL の文脈上の相応性である。したがって、慣用句の翻訳方法の使用とその効率を評定できる主な基準は SL と RL の文脈上の相応性であると見なせる。SL と RL の文脈上の相応性は本質的に SL の言語単位によって現れた意味を RL の同じ意味的働きをする言語単位で再構成し、全体意義構造の等価性をつくることである。すると、今度は文脈上の相応性、あるいは全体意義構造の「等価性」(equivalence)はどんな原則によって実現されるかという疑問が必然的に生ずる。

6. 翻訳の原則と等価性のレベル

A.D.Shveitser (op.cit.113-115)によれば「翻訳はテキストなしでは行われなためテキスト内容のみを重視し、考察する。テキストを解釈する(interpretation)ことはその言語の意義性能の助けによって現れた言語記号を同定すること (identification of linguistic signs)をいう。翻訳は SL の既に同定された言語記号の意義(signification)に相当する意義を RL から見つけ出すことをいう」などといった原則によって実現される。この見解の根拠として、「意義はその言語の構造に属する要素であり、テキストの中で相当する言語記号の道具に過ぎない。」と主張している。また、Z. D. Livovskaya (1985: 81 – 82) は「「意義」は言語的範疇であり、体系的であるためそれぞれの言語単位の表す意義はほかの言語単位の意義と標軸の違い(含有量の特性、体系内の位置など)によって、相当しないことは有り得る。一方、「意味」(meaning)はコミュニケーションを示す範疇であるため言語的の違いに属することはなく、様々な言語にそれぞれ互いに異なる言語単位で表現されることが可能である。」と強調している。したがって、言語の意義はそれに相当する言語形態と同じように可変の量をもつ。よって、「意義」と「意味」の間で克服できない障壁はないことであり、「意味」は「意義」の働きによって表される。言い換えれば、「意味」を伝える道具は「意義」とその性能である。厳密に言えば、ST の意味は RT で同じ意味を表す意義成分の総和、あるいは意義構造から成り立つ。意義構造は様々な言語単位によって形成されるため、上述のように SL の意味が RL では異なった言語単位で現れることが可能である。つまり、翻訳は SL の意味を RL へいわゆる言語単位の働きによって伝えることである。だが、翻訳される言語のそれぞれの相違性から様々な変化 (transformation)が起こる。具体的に言えば、SL の一つの言語単位で表された意味は RL に同じ言語単位でいつも伝えられることはない。場合によって同じ意味的な働きをもつほかの言語単位で表される。したがって、翻訳の原則は SL の意味の不変性を RL に保つために取り入れる様々な変化、あるいは翻訳オペレーション (translation operation)によって実現される。翻訳に生ずる変化は言語と訳している内容によって多数の種類があり、語形 (morphological)、語彙的 (lexical)、統語的 (syntactical)、文体的(stylistic)などのレベルで行われる。よって、翻訳の完成度は SL と RL の意味の不変性、つまり「等価性」(equivalence)で評定されるのである。

7. 等価性のレベルとタイプ

等価性はテキストの要素が互いにどんな形態で等価性を造っているかによってそれぞれ異なったレベルをもつ。つまり、翻訳の様々なモデル、あるいは翻訳がどんな手段・方法、変化によって実現されているかを基に等価性のレベルとタイプが生ずる。等価性のレベルとその類型は次の 4 種類ある。⁵

1. 統語的等価性 (syntactical equivalence): 形式的等価性(formal equivalence)とも呼ばれるが、SL の意味が RL に変化を生じさせず、統語的不変性を保った形で再構成されることをいう。翻訳オペレーションは言語記号(単位)の代用(substitution)になる。この等価性は基本的に翻訳されている両言語の構造上の類似性によって生ずる。
2. 成分的等価性 (component equivalence): 意義的等価性(semantic equivalence)とも呼ばれる。SL の意味が RL に同じ意義構造で訳出されるが、形式面で様々な文法的変化を受ける場合。要するに、SL の意味が RL に文法的のみの変化を受けて訳されることで、意義構造の面においては変化を受けない。このレベルは翻訳されている両言語の文法的構造の相違性によって生ずる。したがって、翻訳オペレーションには語形(morphological)、文法的(grammatical)、統語的(syntactical)レベルの変化がある。
3. 指示的等価性 (referential equivalence): 意義的等価性(semantic equivalence)の一種類であるが、RL に SL の意味が異なった意義成分による構造で再構成される場合をいう。つまり、SL の意義構造が RL では変化するが、結果的に意味の面で等価性をもつ場合である。要するに、SL の指示的意味を RL に異なった語彙意義の総和で一致させて実現することである。したがって、RL が 2. 成分的等価性よりも複雑な語彙的および文法的な変化を受ける点で異なる。主に比喩的および換喩の意味の類似性と相応性を実現しようとする場合に生ずる。概括、具体化、換喩的移転、反意語の再形成などといった多種のタイプの変化によって行われる。よって、翻訳オペレーションは語彙的、文法的、統語的レベル間の変化(lexical-grammatical, lexical-semantic, syntactical transformation between levels)で行われる。
4. 語用論的等価性(pragmatic equivalence): コミュニケーション目的によって SL の意義構造が RL では完全な改変を受ける場合をいう。つまり、SL の意味発想・感情などといった特性を RL に完全かつ正確に伝えるために、文体のレベルで様々な変化を取り入れて訳すことである。特徴は一つのモデルとして定められない種の変化(単語の省略、挿入、表現交換など)によって実現されることである。したがって、翻訳オペレーションは単語の省略、挿入、言い換え・表現交換、再構成 (extension, ellipsis, paraphrase, reconstitution)などといった文体レベルの変化になる。

上記の等価性のレベルとタイプが翻訳の完成度を評定する主な基準となるが、特徴は互いに積層する階層関係をもっている。その階層性の規則は、一つのレベルがほかのレベルを推定できるようなっている。例えば、統語的レベルの等価性は成分的、指示的、実践的レベルの等価性の可能性を推定できる。成分的レベルの等価性は指示的と実践的レベルの可能性を推定でき

ようになっている。また、指示的レベルの等価性は語用論的等価性のレベルの可能性を推定できる。しかし、この逆の従属性は存在しない。要するに、成分的等価性は統語的等価性と独立して存在できる。指示的レベルの等価性は成分的等価性なしに独自に存在する。さらに、語用論的等価性は指示的、成分的、統語的等価性などから独自に存在するということである。等価性のレベルと階層の相互関係をマトリックス表示で示すと次の通りとなる。

図① 等価性のレベルと階層関係

等価性のレベル	変異形のタイプ			
	統語的	成分的	指示的	実践的
統語的	+	+	+	+
成分的(意義的)	-	+	+	+
指示的(意義的)	-	-	+	+
実践的	-	-	-	+

以上は翻訳の完成度を評定する基準となる等価性とそのタイプによるレベル、それらの規則的關係である。

8. 慣用句の翻訳方法の実現・等価性・翻訳オペレーション

日本語からモンゴル語に翻訳された二小説の慣用句の翻訳を考察した際使用されている各方法はそれぞれ翻訳の基本原則である様々な翻訳オペレーションによって実現されていることが明らかだった。したがって、以降は確定した日モ語の慣用句の翻訳に使用されている各方法がそれぞれどんな等価性のレベルを示しており、どんな翻訳オペレーションによって実現されているかを例を上げて、結果をまとめる⁶。

8-1. 直訳・文字通りに訳す方法

この方法は SL の全体的な意味を配慮せずに文字、あるいは単語ごとの意味で RL に直接訳すものである。この方法による翻訳は言語記号の代用という翻訳オペレーションで実現されるように思われる。しかし、意義成分レベルの変化によって行われる場合も見らる。つまり、統語的等価性のレベルと成分的等価性のレベル両方の変化である。

例:a.SL:「慶喜は当初父斉昭に期待され、それが運のたねになった。」(『最後の将軍』司馬遼太郎全集第二十巻 p.302)

RL:Эхлээд эцэг Нариаки нь Ёшинобүд итгэл найдвар тавьж байсан нь түүний хувь заяаны үр болсон. (Шибa Рётарo. Сүүлчийн Шёогун. худ. 26)

モ訳:「~хувь заяаны үр」(khuvi zayanii ur)→「~運のたね」→直訳

変化:SL:「~運の(名詞+属格助詞ノ)+たね(名詞)」

RL:「~хувь заяаны (khuvi zayani) (名詞+ны(nii) 属格接尾辞)+үр (ur) (名詞)」

SLの「~運のたね」という慣用句が統語的普遍性を保ちながら言語記号の代用としてRLに訳されている。具体的には、SLの慣用句はRLに意義構造および文法的構造両面において完全に一致する構成で訳されている。したがって、統語的等価性のレベルを示していると思わせる。しかし、直訳方法はつねに統語的等価性のレベルを示しているのではなく、場合によって成分的等価性レベルを示すこともある。

例:b.SL:「が、慧敏な慶喜は、その程度の春嶽の心うごきは百も承知であつたらしく、目顔で春嶽をおさえ、

—まあまあ春嶽どの、話は、おわりまでおききなされ。というようなしぐさを、目もとでしてみせた。」(『最後の将軍』司馬遼太郎全集第二十巻 p.383)

RL:Гэтэл гүйлгээ ухаант Ёшинобү Шюнгакүг сэтгэл нь хөдлөн ийм байдалд орно гэдгийг зуунтаа мэдэж байсан юм шиг нүд царайгаараа түүнийг намжаан

- Шюнгакү ноёнтон минь, яриаг минь дуустал сонсож хайрла! гэх маягийн дохиог нүднийхээ харцаар үзүүлэв. (Шива Рётаро. *Сүүлчийн Шёогун*. худ. 131 – 132)

モ訳:「~зуунтаа мэдэж байсан」(zuuntaa medej baisan)→「~百回も知り得ていた」→直訳

変化:SL:「~百も(数詞+限度・強調を表すモ助詞)承知で(名詞+原因・理由を表すデ助詞)+あつた(動詞過去形)」

RL:「~зуунтаа (zuuntaa)(数詞反復数形)мэдэж (medej) (動詞連用形)байсан (baisan)(動詞過形)」

SLの慣用句をRLに同じ意義構造で訳出しているが、両言語の文法的機能の特性によって形式的変化が起きている。例えば、SLの「~百も」の量・程度の限界を表すモ係助詞の意義的機能をRLに反復数形の接尾辞~aaが果たしている。要するに、SLの「何度も」という意味を強調する意義成分は日本語の場合量・程度の限界を表す係助詞という言葉単位になっているが、RLであるモンゴル語に反復数形があるためその意味を~aa (-aa)接尾辞という言葉単位で表しているのである。また、SLの「~承知であつた」の「原因・理由を表す助詞デ」が強調する「~知っている状態であつた」の意味をRLに「мэдэж (medej) (知って) (動詞連用形)の~ж (-j)接尾辞+(いた)」という意味を表す「байсан (baisan) (動詞過去形)」が表している。つまり、それぞれ意義成分のレベルでの変化はあるが、意義構造の面で一致している。よって、成分的等価性のレベルで行われていると見なせる。なお、翻訳オペレーションは語形、文法的レベルの変化になる。

例 a.と b.から直訳・文字通りに訳す方法は、場合によって統語的と成分的等価性のレベル両方を示していることは明確である。また、同じ種の翻訳オペレーションによって実現されている。この現象は日本語とモンゴル語は同じアルタイ語源を有する言語であり、構造の面で類似性と相違性の両方をもっている点から生じていると考える。

8-2. 相当語句で訳す方法

相当語句で訳す方法とは SL の慣用句と意義構造、イメージの面で完全に一致する RL の句で訳すことをいう。したがって、この翻訳方法は上述の直訳・文字通りに訳す方法と同じ翻訳オペレーションによって実現され、同じ等価性のレベルを示すと推定できる。

例:a. SL:「慶喜が江戸からつれてきている新門辰五郎とその配下の火消たちまで、遊里などで諸藩の士のはなしに耳をすまし、密偵としてのはたらきをした。」(『最後の将軍』司馬遼太郎 p.227)

RL: Эдогоос дагуулан ирсэн Шинмон Тацүгоро болон түүний мэдлийн гал унтраагчид нь хүртэл нутаг орон руугаа явахдаа овог хошуудын ноёд ихсийн яриаг чих тавин тагнуул шиг л хөдөлцгөөж байв. (ШИБА Рётаро. *Сүүлчийн Шёогун*. худ. 154)

モ訳:「～чих тавин」(chikh tavin) →「～耳をすまし」→相当語句訳

変化:SL:「～耳を(名詞+対格のヲ助詞)+すまし(動詞連用形)」

RL:「～чих (chikh)(名詞+対格の Ø 形)+тавин (tavin)(動詞連用形)」

SL と RL の慣用句は両方とも同じ意義構造を成すほか何か文法的な変化も起きていない。RL に SL の「対格助詞ヲ」が同じ「対格の Ø 形」になっており、接尾辞による形態はないが、機能的に同等の働きをしている。つまり、完全な言語単位の代用となっており、統語的不変性も保たれている。

例:b. SL:「おそらく彼女の教育が、ステップの住民の記憶に、「美しいものとして残るにちがいない」と結んでいるのは、すでに“満州国”崩壊を予感しているかのようで、胸が苦しくなるような叙述である。」(『草原の記』司馬遼太郎 p.170)

RL: Лавтай энэ эмэгтэйн сурган хүмүүжүүлэх ажил тал нутгийн хүн зоны ой тойнд “ гоо сайхан зүйл болж үлдэх нь дамжиггүй “ гэж тодорхойлсон нь аль эрт Манж Го Улс сүйрэхийг мэдэрч байсан бололтой тул өр өвдөм баримт юм. (ШИБА Рётаро. *Тал нутгийн тэмдэглэл*. худ. 125)

モ訳:「～өр өвдөм」(ur uvdum) →「～胸が苦しむ(痛む)ような」→相当語句訳

変化:SL:「～胸が(名詞+状態の対象を表すガ助詞)+苦しくなるような(形容詞+補助動詞+比喩的な意味を現す複合助辞)(修飾節)」

RL:「～өр (ur)(名詞+主格の Ø 形) + өвдөм (uvdum)(動詞+能動詞語幹による形容詞形成接辞 м(m)) (修飾節)」

SL と RL の慣用句の意義構造が一致しているが、意義成分のレベルでは異なった言語単位で現れている。よって、品詞の入れ換え、語形レベルでの変化が起きている。具体的に言えば、SL での「痛む」の意味を「形容詞+補助動詞」で表しているのに対し、RL では「動詞+能動詞語幹による形容詞形成接辞 м(m)」の構成になっている。したがって、これは成分的等価性のレベルを示していると見なせる。また、翻訳オペレーションは語形、語彙的、文法的変化になっている。例 a. と b. から。相当語句訳は直訳方法と同じように統語的および成分的等価性のレベルを示していることが明らかである。また、この二つの翻訳方法は両方とも言語記号の代用、語形的、語彙的、文法的変化などの翻訳オペレーションで実現されている。

8-3. 類推して訳す方法

類推して訳す方法は、SL の句と意義構造・イメージの面で異なるが、結果的に同じ概念・事柄を示す RL の句で訳すことであるため、SL の慣用句の意義構造が RL で変化することが推定できる。よって、それにともなう様々な文法的変化も予測される。

SL:「平岡は言い、「また来るように」といって渋沢を志士として鄭重に遇し、ひきとらせた。同時に(あの男を手に入れたい)と思った。」(『最後の将軍』司馬遼太郎全集第二十巻 p.339)

- Тийм юм байхгүй шүү. Дахин ирээрэй
гээд Шибүсаваг эх орончийн хувиар хүндэтгэж хариулав. Бас “ энэ залууг өөрийн болгох юм сан “ гэж ч боджээ. (Шибя Рётаро. *Сүүлчийн Шёогүн*. худ. 73)

モ訳:「～өөрийн болгох юм сан」(uuriin bolgokh yum san) →「～自分のものにしたい」→類推訳

変化:SL:「手に(名詞+場所を表す二助詞)+入れたい(動詞から変化した希望を表す形容詞)」

RL:「өөрийн (uuriin)(再帰代名詞+属格の ийн (iin)接尾辞)+болгох (bolgokh)(動詞使役形)юм сан (yum san)(意向を表す後置詞)

上記の例から SL と RL の慣用句の意義構造が異なっていることは明らかである。例えば、SL の「～手に入れたい」という慣用句の意味を表す RL の句の意義構造は「～自分のものにしたい」となっている。しかし、結果的に SL の慣用句の表す「自分の所有とする」ことの指示的意味を RL の慣用句が表している。よって、指示的等価性のレベルを示しており、RL が表現形式の面で受ける変化は語彙的、文法的レベルになる。主要な変化は統語的等価性と成分的等価性のレベルと意義構造が変化する点である。

8-4. 説明的に訳す方法

説明的に訳す方法は SL の慣用句を RL に訳せない場合に使用される。基本的には SL の慣用句の意味を完全に分析して、描写・説明などを取り入れて訳すことである。よって、SL と RL の間に生ずる変化が多種の変異をもつと推定できる。

SL:「幕閣と大奥は、水戸のあくのつよさをきらい、慶喜よりも紀州の少年藩主を迎えようという色が濃いが、しかし老中松平忠固の態度は表面いずれともつかない。」(『最後の将軍』司馬遼太郎 p.49)

RL: Бакүфү засаг, хатны өргөөнийхөн Мито овгийнхны хорт санааны айхтарт дургүйцэн, Ёшинобү гэхээсээ Кишюү овгоос залуу хошуу захирагч хүүг залах хүсэлтэй хүн олон байв. (Шиба Рётаро. *Сүүлчийн Шёогүн*. худ. 39)

モ訳:「～хүсэлтэй хүн олон байв」(khuseltei khun olon baiv)→「～希望のある人が多かった」→説明的訳

変化: SL:「～色が(名詞+状態の対象を表すガ助詞)+濃い(形容詞)

RL:「～хүсэлтэй (khuseltei)(名詞+共同格の тэй(tei)接尾辞)+ хүн (khun)(名詞)+ олон (olon)(形容詞) байв (baiv)(動詞過去形)」

SL の慣用句の意味を RL では「～希望のある人が多かった」と一つの表現で説明し、訳しており、RL に単語の増加が起きている。また、RT の文体統一のために、ST の前半を「～色が濃い」→「～хүсэлтэй хүн олон байв」(khuseltei baiv) 部分で切り、後半をもう一つの独立した文にする省略 (ellipsis)を取り入れている。よって、翻訳オペレーションは語彙的、統語的、文体的レベルの変化によって行われており、語用論的等価性のレベルを示していると見なせる。なお、説明的な方法はテキストの文体レベルの変化を取り入れて意味内容を伝達しているため、生じる変化は様々なものになる。つまり、RL に生じる文体的レベルの変化は語彙・意義的、語彙・文法的、統語的などといったレベル間の変化も含むより複雑な形態になるため、一つのモデルとして定めることは不可能である。翻訳オペレーションは単語の増加・挿入、言い換え・表現交換などといった文体レベルの変化になる。したがって、語用論的な等価性のレベルを示していると見なすことができる。

以上、日モ語の慣用句の翻訳方法が示している等価性のレベルをまとめれば次の通りとなる。

1. 直訳方法 → 統語的等価性(形式的等価性)、成分的等価性(意義的等価性)のレベル
2. 相当語句で訳す方法 → 統語的等価性(形式的等価性)、成分的等価性(意義的等価性)のレベル
3. 類推して訳す方法 → 指示的等価性(意義的等価性)のレベル

4. 説明的に訳す方法 → 実践的等価性のレベル

上記の結果から慣用句の翻訳方法が、訳出の形態と用いる手段によってそれぞれ定められた等価性のレベルを示しており、翻訳オペレーションのタイプとレベルも推定できるようになっている。したがって、翻訳全般論にあげられている等価性の階層関係の規則に即して実現されていると見なせる。その規則性は以下のマトリックス表示で明示できる。

表② 日モ語の慣用句の翻訳方法と等価性の階層関係

等価性のレベル	翻訳方法の変異形・タイプ			
	直訳	相当語句	類推	説明 (描写)
統語的等価性(形式的)	+	+	+	+
成分的等価性(意義的)	+	+	+	+
指示的等価性(意義的)	-	-	+	+
実践的等価性	-	-	-	+

上記の表示から日モ語の慣用句に使用している翻訳方法はそれぞれ定められた等価性のレベルを示しているほか、互いに積層する階層関係をもっていることが明確である。そして翻訳全体にあげられている等価性の階層関係に即した規則性をもっていることが理解できる。よって、慣用句の各翻訳方法が原則的に定められた翻訳オペレーションによって実現されており、そのタイプとレベルは次の通りとなる。

1. 代用(substitution)
2. 語形的・文法的変化(grammatical and semantic transformation)
3. 語彙・文法的、語彙・意義的、統語的などといったレベル間の変化(lexical-grammatical, lexical-semantic, syntactical transformation between levels)
4. 単語の増加、省略、言い換え、再編成、文の拡大・省略など文体レベルの変化(extension, ellipsis, paraphrase, reconstitution in stylistic level)

8. 結論

本稿は日本語の慣用句がモンゴル語にどんな翻訳方法で訳されているかを明確にし、翻訳する根本的な原則をさぐることを目的とした。そのために慣用句の翻訳に求められる理論的な概念・規定を明確にし、慣用句の翻訳に関する先行研究を概観した。その結果、これまで提唱された

慣用句の翻訳方法のより客観的なモデルとして 1. 相当語句で訳す方法、2. 直訳方法、3. 類推して訳す方法、4. 説明的に訳す方法などを見出した。次に日本語からモンゴル語に翻訳された文学作品から慣用句の翻訳を抜粋し、分析を行った。文学作品は日本の作家司馬遼太郎の『草原の記』、『最後の将軍』という二小説のモンゴル語訳である。日本語の慣用句として V.V.Vinogradov (loc.cit.)、D.Dashdavaa (loc.cit.) の定義した慣用句の分類方式に合うものを選び、対象とした。考察の結果、200 句が見つかり、上述の四つの方法全てが使用されていることが明確になった。各翻訳方法の占める割合は 1. 説明的訳 65%、2. 類推訳 24%、3. 直訳 4.5%、4. 相当語句訳 4.5%となる。よって、割合的に最もよく使用されている方法は説明的訳であり、両言語の文化の違いによる言語的相違、文脈上の相応性などが影響している。次に、類推して訳す方法が多く使用されており、両言語に意義構造とイメージの面では異なるが、結果的に同じ概念・事柄を示す慣用句が少なくないという事実を示している。慣用句のイメージが異なっても同じ概念・事柄を指すことは両民族の考え方、環境に対する生活観の評価などに共通性があることを示唆している。そのほか、使用の割合は少ないが、相当語句で訳す方法は意義構造およびイメージ両面で完全に一致することから両民族の共通性をより著しく示していると言える。また、直訳と説明的訳を互いに結合して訳す場合も見られた。この現象は上述の四つの方法が互いに結合し、変異できることを示している。だが、それは、考察を行った 200 句の翻訳のうち 2%しか占めていないため、一定の翻訳方法の変異であると決定的に位置付けることは難しいと考える。しかしながら、対象の量を増やした場合こういった結合方法の変異を確定できる可能性がある。

次に慣用句を翻訳する各方法の実現される原則を確定するために、文脈との相応性と有効に使用できる基本的な条件を明確にした。その結果、各方法がそれぞれ一定の場合効果的に使用できるようになっているが、決定的な条件は SL と RL の文脈上の相応性であることが明らかになった。したがって、翻訳方法の効率を評定できる基準は文脈上の等価性であり、それを実現する手段を考察した。そのために翻訳の理論的な原則を明らかにした。よって、翻訳は様々なオペレーションによって実現されるものであり、それぞれ定められた等価性のレベルをもっていることが明確になった。さらに、等価性のレベルは互いに積層した階層関係をもっている点を考慮し、確定した慣用句の各翻訳方法の分析を行った。その結果、各方法はそれぞれ定められた等価性のレベルを示すほか、同じ階層関係をもっていることが明確になった。そして翻訳全体にあげられている等価性の階層関係に即した規則性を示していることを指摘した。なお、慣用句の各翻訳方法は原則的に定められた翻訳オペレーションによって実現されており、そのタイプとレベルは次の通りとなる。

1. 直訳方法と相当語句で訳す方法 → 代用(substitution)、語形的・文法的変化(grammatical and semantic transformation)
2. 類推して訳す方法 → 語彙・文法的、語彙・意義的、統語的などといったレベル間の変化 (lexical-grammatical, lexical-semantic, syntactical transformation between levels)

3. 説明的に訳す方法 → 単語の増加、省略、言い換え、再編成、文の拡大・省略など文体レベルの変化(extension, ellipsis, paraphrase, reconstitution in stylistic level)

本研究の結果は日モ語の慣用句の翻訳に使用している各方法全てが翻訳全般における原則と同等の働きによって行われていることを示している。その根拠は慣用句がもつ意味単位の大きさにあると考える。

.....

【謝辞】本論文の執筆にあたってご指導をいただきました筑波大学大学院・人文社会科学研究所の石田プリシラ准教授ならびにモンゴル国立教育大学大学院外国語学部 S. Erdenemaam 教授にこの場をお借りして深く感謝を申し上げます。加えて、「日本通訳翻訳学会第 11 回年次大会」の口頭発表の際貴重なコメントをいただいた神戸大学の藤濤文子教授に心から感謝の意を表します。そして、草稿の校正を引き受けていただいた居関友理子さんに心より感謝致します。

【著者紹介】

アシガイ・デルゲルマー (Ashgai Delgermaa) 筑波大学大学院人文社会科学研究所特別研究生 モンゴル国立教育大学大学院 博士課程後期院生 専門分野は翻訳論、慣用句論、語彙論、意味論

.....

【注】

1) 慣用句の特性として意味的固定性(イディオム性)、慣用性、再生産性などを取り上げている。Ashgai Delgermaa (2009)「慣用句の発生、構成、分類について」では慣用句の特性を理論的に解説し、それぞれの関連性、核となる性質などを明確にしている。よって、慣用句の特性が文脈全体の意味総和に大きな影響を与えるだけではなく、完結した意味をもつ独立した単位となる。意味単位の大きさと文脈に匹敵するという事実を根拠に、最も訳しにくい単位と見なしている。

2) これまでの翻訳の定義は学者・研究者、また考察の観点によって異なる場合が多いが、本論文では A. V..Fyodorov (1983d)、A.D.Shveitser (1988)、R.Gurbazar (1996)などの、テキストを重視する概念・主張を取り上げることとする。

3) D. Dashdavaa (1973) が露モ語の慣用句の翻訳方法として 1) 相当語句で訳す方法、2) 類推して訳す方法、3) 抽出類推訳法、4) コンテキストレベルの交換、5) 直訳方法、6) 説明的に訳す方法などといった六つ種類の方法を提唱している。しかし、3) 抽出類推訳法と 4) コンテキストレベルの交換は実際、2) の SL の慣用句と意義構造のレベルで異なるが、結果的に同じ意味を指す慣用句を RL から見つけ出し、類推して訳す方法の一つの変異(variation) である。そのゆえ、本質的に同じことを指しているこの二つの方法を省略し、本研究では残りの四つの方法を基本的な方法として援用する。

4) Ashgai Delgermaa (2009)「慣用句の発生、構成、分類について」では日モ語の慣用句の慣用連語研究の全範囲を規定した分類方式を提唱している。分類の基準としては意味的固定性(イディオム性)、慣用性、再生産性などをあげており、1) 慣用連語融合、2) 慣用連語統語、3) 慣用連語結合、4) 慣用連語表現と区分している。この分類方式の根拠として V.V.Vinogradov (1946) の概念を基に D.Dashdavaa (1973) の定めた分類方式は慣用連語単位の普遍的な特性を広い範囲で規定しているため、慣用句の考察を翻訳論の枠組内に位置付けるのに適切であると主張している。日本語の慣用句の分類に関しては付録を参照されたい。

5) 等価性の類型およびそれらの相互関係において、意味伝達の点が優位に立っていることを E. A. Nida, R. Taber, S. Brannen (1969)などが初めて記し、V. Koller (1983)、V.N. Komissarov (1980)はそれぞれ異なった観点から等価性のレベルと相互関係を位置付けている。A.D. Shveitser (1988) は等価性の階層関係をより明確に設定している。

6) 直訳と説明的訳の結合方法は慣用句を翻訳する主な四つの方法の変異であることを根拠に対象外とする。

【作品】

司馬遼太郎(1967)『最後の将軍』文藝春秋株式会社

— (1996)『最後の将軍』デレグトゥムルバートル訳 モンゴル・日本文化交流支援協会「アリアンス」

司馬遼太郎(1997)『草原の記』モンゴル・日本文化交流支援協会「アリアンス」

— (1997)『草原の記』オチルフージャルガルサイハン訳 モンゴル・日本文化交流支援協会「アリアンス」

【参考文献】

Chernisheva, N. E. (1954). Phraseologicheskie edinitsi niemetskogo yazika i problema ikh perevoda.

Nekotore voprosi izucheniya slovarnogo sostava yazika. [Some aspects of linguistic vocabulary component study]. p. 11. Moscow.

Dashdavaa, D. (1973). Sravnitelino sopostavitelinoe issledovanie phraseologii v russkikh i mongoliskikh yazikakh. [Comparative–contrastive studies of phraseology in Russian – Mongolian language]. State University of Moscow. Ph. D. Thesis. Moscow.

Fyodorov, A. V. (1968c, 2002d). Osnovi obshei teorii perevoda. [The basics of translation theory]. pp. 218. 194- 206, 197, 28 – 32. Moscow.

Gak, V., Retsker, Ya (1963). Perevod phraseologicheskikh edinits. Phrantsusko – russkii phraseologicheskii slovari. [French – Russian phraseology dictionary]. [see the introduction part]. Moscow.

Gurbazar, R. (1996). Orchuulgiin onol dadaliin undes. [The basics of translation theory and practice]. p. 5. Ulaanbaatar.

Kunin, A. V. (1956, 1964). O perevode analogicheskikh phraseologizmov v anglo – russkom phraseologicheskome slovare. Sbornik tetradi perevodchika. [Daigests of interpreter’s note]. pp. 11., 5.

Moscow.

Livovskaya Z. D. (1985) Teoreticheskie problemi perevoda. [The theoretical problems of translation]. pp. 81 – 82, Moscow. Nauka.

Shveitser. A. D. (1988). TEORIYA PEREVODA: status. Problemi, aspekti. [THE THEORY OF TRANSLATION: status. Problems and aspects]. pp. 80 – 86, pp. 113 - 115 Moscow.

Vinogradov. V. V. (1947). Ob osnovnikh tipakh phraseologicheskikh edinits v russkom yazike. [About main types of phraseological units in Russian language]. 347. Moscow.

ナイダ,A、ティーバ,R、ブラネン,S. (1973b). 『翻訳 — 理論と実際』.(沢登春仁、升川潔訳.) 研究社出版、pp.102-105、132-135、154-161.

中村保男(1983). 『翻訳はどこまで可能か』ジャパントイムズ, pp. 42-45.

【出典】

Tumurtoogoo. D. (2004). A concise dictionary of linguistics. (Mongolian – Russian – English). Admon Ltd., Ulaanbaatar. 266 pp.

バドラル. N. (2007). 『言語学辞典』(モ日一日モ). トゥムルトゴー. D編. アドモン株式会社. ウランバートル. 197 pp.

『用例でわかる慣用句辞典』. 学研辞典編集部. 学習研究社. (2007). 459pp.

【付録】

日本語の慣用句の分類 以下はV.V.Vinogradov (1946) の概念を基にD.Dashdavaa (1973)が定めた慣用句の分類方式に合うものを日本語からモンゴル語に翻訳された文学作品から抜粋し、まとめた表である。

№	① 慣用連語融合(phraseological fusion) 句全体の意味が構成要素の意味の総和と全く関係のない最も固定した意味をもつ句。構成要素の意義成分化が不可能で、何らかの動機づけおよび生産性をもっていない。また、慣用句と一般連語句の意味を同時に表すものがあるが、同音の違いみに限る。	№	③ 慣用連語結合 (phraseological combination) 意義成分化が可能で、構成要素の一部が要素の意味を直接表すが、片方は転義的で、限られた意義的機能をもつ句。また、その意味を類義的慣用句、連語句などで表せることが特徴。
1	めくじらを立てる	1	足をひっぱられる
2	血が濃い	2	一足先
3	牛耳じる(牛耳をとる)	3	足を運ぶ
4	明を曇らせる	4	足を入れる
5	歯止めをかませる	5	気に入る

6	脈はある	6	気が遠くなる
7	大斧をふる	7	気が滅入る
8	皮肉をいう	8	気がつよい
9	興入れする	9	気がひける
10	軌道にのせる	10	気づく(気がつく)
11	とうが立つ	11	気休め(気を休める)
12	折りをみる	12	念を押す
13	腹にすえかねる	13	念をもつ
14	愁眉をひらく	14	念願に入れる
15	裏腹な	15	念をかさねる
16	気おい立つ	16	念を入れる
17	手足になる	17	手に職がつく
18	壁に耳	18	手に負えない
19	耳目をあつめる	19	手数がはぶける
20	面を伏せる	20	手に入れる
21	腹のうち	21	手にこめる
22	血気のある	22	先手をとる
23	気骨ある	23	手がまわる
24	泥をかぶる	24	手にあまる
25	気脈を通ずる	25	手に乗せられる
26	高腰になる	26	手を引く
27	片腹痛い	27	手に入る
28	歯止めを施す	28	手っ取り早い
29	符をあわせる	29	手を貸す
30	木で鼻をくくる	30	風雲の核心
31	腹立たしい	31	風雲に乗じる

32	片肌をぬぐ	32	口にする
33	面の皮	33	口に出す
34	上前をはねる	34	口やかましい
35	腹でいる	35	口を割る
36	皮算用のうえ	36	根をおろす
37	槍玉にあげられる(槍玉にする)	37	根づく
38	骨を折る	38	耳をすます
39	血を送る	39	耳をかす
40	においが濃い	40	耳を疑う
41	色が濃い	41	腰がくだける
42	根づよい	42	腰ぬけ(腰がぬける)
43	腰を折る	43	身をかわず
44	手がない	44	身を反らせる
45	手をうつ	45	身を退く
46	手きびしい	46	身をよせる
47	手わけする	47	胸にこたえる
48	腹がある	48	度胸をきめる
49	肉体に乗せる	49	胸が苦しくなるような
50	肩がわり	50	胸をつまらせる
51	風が通る	51	息を詰める
52	壁がる	52	息をひそめる
53	腰をおろす	53	息をひきとる
54	手違い	54	見切りをつける
№	② 慣用連語統合(phraseological unity) 意義的成分化が不可能であるが、句全体の意味は構成要素個々の意味の総和から間接的に現れる句。	55	首をかしげる

1	気概をもつ	56	首を横にふる
2	わき腹の男子	57	首をひねる
3	役に立つ	58	歡心を得る
4	三者択一をせまる	59	運びになる
5	韜晦逃避の心	60	一命をなげうる
6	一頭ぬきでいる	61	起伏に富む
7	手籠にする	62	色彩がつく
8	極彩色を塗り上げる	63	脳裏にうかべる
9	事が運ぶ	64	脳裏にある
10	恥のうわ塗り	65	利益を生む
11	蒙を啓く	66	猛威をふるう
12	沙汰やみになる	67	察しのはやい
13	上塗りだけの擬装	68	味がある
14	唯一無二の	69	風のたより
15	背をむける	70	尋常のすじ
16	並たいてい	71	運のたね
17	伯子ぬけ	72	稀世の頭脳
18	韻を踏む	73	明日を測れない
19	百も承知	74	世に立つ
20	うかがいを立てる	75	威儀を正す
21	百年もつとめる	76	活路を見出す
22	手回りの品物	77	舌をまく
23	満端をととのえる	78	座を和らげる
24	間抜けなこと	79	怒りを買う
25	隊伍を組む	80	風骨をやわらげる
26	病み付き(病み付く)	81	一筋縄ではいかない

27	はめになる	82	転向を嗅ぎつける
28	傘下に組み入れる(傘下に入る)	83	縁を切る
29	はずみをつける	84	血縁がこい
30	口火になる	85	尻押しする
31	居ずまいを正す	86	あと押しする
32	ななめに見る	No	④ 慣用連語表現 (phraseological expression) 構成要素の連結使用が固定しているが、意義的成分化が可能で、互いに意義的自由関係にある句。(ことわざ、格言・俚諺など)
33	千載一遇	1	毒にも薬にもならない
34	筆舌に尽しがたい	2	人は毒であっても用い方では薬になる
35	そ知らぬ顔	3	百芸の才の持ち主
36	含みのある	4	手を替え品を替え
37	四方八方	5	非常の時は非常の士にあらずんば
38	金目のもの	6	敵を知りおのれを知れば百戦すともあやうからず
39	様変わりする	7	禍はしょうしょうの内にあり
40	身の上ばなし	8	舌の根もかわかぬうちに
41	人がましい	9	胸の奥を見ぬく
42	陰膳(カゲゼン)を供える	10	着のみ着のまま
43	筋道をたてる	11	寝首を搔くような
		12	何の足しにもならない
		13	泥棒にも三分の理
		14	泥沼の状態におちこむ
		15	苦勞の帳尻が合う
		16	手のうちを見ぬく
		17	見て見ぬふりをする

